

おぐに移住者コミュニティつむぐ

創設者 横山 真由美 氏



【日本有数の豪雪地帯「小国町」】

始めに小国町の紹介をします。小国町は人口約七千人の町で面積は東京二十三区よりも大きく、森林が九十%以上を占める、日本有数の豪雪地帯です。

次に私の自己紹介をします。出身は小国町で小国町役場の総務企画課に勤めています。愛犬との散歩が毎日の息抜きになっています。

【つむぐの立ち上げ】

移住担当として仕事をする中で、移住者を呼び込む支援はあるけれど、その後フォローはできているのだろうかと思いい、移住者女子会を開いてニーズを聞いてみたいと思ったことがきっかけです。

移住者女性五人に集まってもらい話を聞いてみると「子供の洋服の問題」や、「雪の問題」などで困っている事がわかりました。そこでみんなが集まって良いことも困っていることもお互いに「共感」するため、令和二年十月に「移住者コミュニティつむぐ」を立ち上げました。当初は移住者だけのつながりでしたが、その後地域の方々も加わるようになり、今年の七月七日時点で九十人の会員がいます。具体的な「つむぐ」の仕組みですが、つな

がる場としてグループLINEを活用しています。移住者同士の情報交換や地域の情報提供などLINEで行っているのですが、しくみはシンプルにして、地域の人とのつながりも大事にしながら、

様々なことを強制せず、ゆるくつながることが大切だと感じています。

【女性起業家の増加】

さて、小国町では近年、女性の起業家が増えています。なぜ、起業家が増えたのかというと、「つむぐ」でつながったことにより、起業するためのノウハウをお互いに共有できたことが大きな理由です。例えば保健所の申請や、補助金の申請は、一人では、なかなかハードルが高いですよね。でも、そんな時、「私、申請したことがあるから教えられるよ。」とお互いに経験を共有し合う光景がつむぐの中で何度もありました。また、ノウハウの習得はもちろんです。また、つながったことにより、起業に対しての精神的なハードルがすく下がったことが重要だったと感じています。

実際に起業家の件数はどうなったかというところ、「つむぐ」を立ち上げた令和二年度から令和四年度の起業に対する助成金

の活用実績が、令和二年度は起業者三人のうち一人が女性移住者、令和三年度は起業者二人のどちらも女性移住者、令和四年度は起業者五人のうち三人が女性移住者となっています。

「つむぐ」が立ち上がる少し前に小国町は女性の起業支援補助金の金額を十万円かさ上げしました。当時、私も、商工部門において、補助金の仕組みづくりに関わっていて、女性の起業を後押ししたい気持ちがありました。実際、女性移住者の活用が多く、その後、起業者が増えたので、かさ上げも効果があったのかなと嬉しく思っています。起業の内容は様々で、移住前の職業を活かして起業する人もいれば、移住してから山菜などの地域資源を活かして起業する人もいます。

ここまでのまとめとして、移住者が「つむぐ」という共感の場を持ったことで、楽しみ方や困りごとを一緒に共有ができるようになりました。加えて、自分もできるといふ連鎖から、起業など新しいことに挑戦する動きも見えています。また、移住者同士や移住者と地域の方がつながる速度が倍速となりました。

また、地域の人と繋がったことにより、一人でやると解決までに時間がかかるこ

とも、暮らしのコツを伝授してもらったことで小国町で暮らす中での様々な負担が少し軽くなりました。私たちは、「つむぐ」を通して誰かとつながってほしいというコンセプトで進めています。みんなと一緒に活動するだけではなく、その中の誰かとつながってくれて、ここでの暮らしが少しでも楽しくなるといいなという思いで活動をしています。

【地域との関わり】

地域の方にもいいことがあって、移住者が新しい視点や多様な価値観を持っているので、自分たちの地域の良さを再確認しています。移住者に対して地域の方は「なんでこんな雪深い田舎にきたの？」と質問することが多いのですが、移住者が「こんな素敵な場所はないですよ」と自分たちの価値観で地域を褒めると、「ほかにこんないい場所があるよ」「実はこれもすごく美味しいんだよ」と、地域の人から積極的に移住者に様々なことを伝えてくれるようになります。それを繰り返しているうちに、地域の人が自分の地域に自信を持てるという好循環が生まれているのです。価値観が違う人と繋がることの大切さを「つむぐ」を通して改め

て感じています。

ここまでの概要なのですが、今回は県の商業部門からお声がけいただいたので「つむぐマルシェ」について話をしたいと思います。

【つむぐマルシェ】

「つむぐマルシェ」は、中心商店街にある「アスモ」というショッピングセンターの駐車場で行っています。開催のきっかけは、先ほどもお話したように、刺繍やロウソク作りなど、スキルを持った移住者がすごく多かったことで、自分たちの作品をみんなに知ってもらいたいし、さらに「つむぐ」も知ってもらおうという目的でマルシェを始めました。

初めてのマルシェでは出店数はハブース、ステージ発表では馬頭琴奏者に出演してもらいました。なぜ馬頭琴奏者かという点、私の高校の同級生なんです。何もしないので、同級生のつながりで来てもらいました。肌感覚ですが、二百人くらいは来てもらったのかなと思います。コロナ禍ですごく大変だったんですけど、自分たちのスキルを生かしたマルシェが

できてすぐ満足しました。SDGsをテーマにしたので、テレビ取材も来ました。ただ、課題としては「移住者しか参加できないマルシェでしょうか?」とか、「おしゃれすぎて近寄れない」という意見が地域からありました。移住者は意識が高くて本当に見るからにおしゃれなんです。どうやら、地元のおばあちゃん達が入りにくい雰囲気を出していたようです。

そして翌年、課題を解決しようということで、農協女性部や地元の青年部に出店を依頼して、とれたて野菜やイワナの塩焼きを出して欲しいとお願いしました。あとは地域のお菓子屋さんや文化協会を通して手芸等が得意な方に声かけをするなど、なるべく地域のマルシェにしようと奮闘しました。嬉しいことに地域のダンスチームがステージに立ってくれたことや地元の方の出店が増えたことによつて、地域のお客さんもかなり増えました。さらに地元小国高校とのコラボでは、生徒が自ら調べたSDGsのパネルを展示するなど、令和四年は地域密着のマルシェを行うことができました。ただ、資金が足りないという新たな課題が生じました。資金は一ブラス千円のお金のみで、二十六ブラスだと二万六千円が入ってき

ますが、会場使用料や音響、出演者に謝金を払うとギリギリで、来年はどうしようかという話をしていました。

そこで話し合って、三年目に出演料を廃止しました。今までは、ステージに出してくれた皆さんに出演料を支払っていたのですが、「もう払うのをやめます」と申し訳ない気持ちで交渉をしてみました。すると、「出演料はいりません。コロナ禍で見てもらうことが全然なかったのので、見てもらえる場があれば十分です。」という反応が多く私たちも驚きました。すると、さらに素敵なことが起こりました。

出演者にお金を払わないことになって、お客様ではなくスタッフ寄りになったんです。「こういう角度にするのもっと見ると思います」とか、「レイアウトはお客様が通りやすい方がいいですね」と、いつの間にか出演者もスタッフの一員のようない役割になり、「成功させたい」という想いで繋がっている気がしました。また、他地域からの出展がすごく増えて、朝日町や隣の飯豊町からは五店舗も出店してくれました。なぜ、出店が広がったのかというと、「つむぐ」のメンバーがそれぞれ交渉に回ったことも大きな要因です。例えば、おいしくて自分が大好きな

パン屋さん「うちのマルシェに出てくれないませんか」といった具合に交渉します。また、朝日町は女性グループを立ち上げたいという話があって、「つむぐ」のメンバーが立ち上げを少しお手伝いして、グループ間の交流が生まれ、そのつながりで今年の出店があります。また今回は、ステージが盛りだくさんになって、地元のお母さんたちが普段習っているフラダンスを披露してくださったり、和太鼓クラブや、中高生の吹奏楽部が大人と一緒に演奏をしてくれました。そのほかにも移住者による漫才コンビやダンスが得意な青年がステージで踊ったりと、いつの間にか地域の文化祭みたいになっていました。孫の様子を見ようと、おばあちゃんたちも遊びに来てくれて、その姿を見た時に、やっと地域のマルシェになったのかなとホッとした気持ちになりました。その日は小国町が賑やかだけれども、どこかゆったりと心地いい一日となりました。

今後は、これを繋いでくれる「つむぐ」のコアメンバーが増え、持続していくことが目標です。出産などで参加できないメンバーも多いので、もう少しスタッフ側が増えるといいなと思っています。

【多様な主体性の必要性】

最後にまとめですが、これからは多様な主体が必要だと思っていて、移住者は様々な主体になり得るとすごく可能性を感じています。やっぱり意識が高い方が多いです。そもそも田舎を楽しもうとして来ている方が多いので、地元の私たちとちょっと違う意気込みだし、こちらに住むぐらいなので行動力は抜群です。また、コミュニケーション能力も高いです。これからは移住者にどんどん前に出て来てもらえたらと思っています。「つむぐマルシェ」は毎年参加者やブースが増えています。実質七人でマルシェを運営しています。これは、「何かやりたい」という気持ちがあっても一人ではできないものが、七人いればできるということを実証していると思っています。ただし、七人でもめちゃくちゃ大変です。一か月間は仕事と仕事の合間を縫って様々な準備をやっているし、夜に子供を寝かしつけてからZoomでの打ち合わせを繰り返しています。そこまでして開催する原動力は何なのかと考えると、「私たちの作りたいマルシェがイメージとしてある」ということが大きいのかなと思っています。

先ほどパン屋さんと交渉した話をしましたが、自分たちの好きなこだわりのマルシェをしたからこそ、自らの足で歩いて交渉したり、時間を削って準備できるのだと思います。招待されるマルシェではなく、自分たちが作るマルシェだからですね。

そして、当日、参加者から「こんな素敵なマルシェを作ってくれてありがとう」と褒めていただくメンバー七人は、みんな嬉しくて涙目になるんです。学園祭の実行委員みたいな感じで、やり遂げた充実感がすごくて。それは凄いい中毒性があるんですよ。「よし！また来年やるぞ」みたいな感じで、結局同じメンバーで毎年やっています。

【自然発生した「つむぐ」】

「つむぐ」も「つむぐマルシェ」も行政から作ってくださいますと言われたことは一度もなく、どちらも自然発生的に生まれたものなんです。やってみたい気持ちって、多分誰にでもあるんですけれど、それは一人ではできません。だから、やっぱり仲間が必要だし、もっと言うと、プロデュースする人が必要です。私自身、プロデューサーという役割を、まだまだ

担っていませんが、私は役場職員という立場上、周囲の方からほんの少し信頼があります。あとは、いろいろな補助金や事務手続きなどのスキルがあります。さらに、いろいろな人を知っているという人脈もあります。だから本来、役場職員という立場は、プロデューサーとしてはもってこいだと思うんです。彼女たちが本気で「やりたい」「どうしたらいい？」と言ったら伴走しながら、できるだけ一緒に取り組みたいと思っています。時々、「今のタイミングで進めたらどう？」「この方に交渉してみたら？」などのアドバイスをするので、つむぐのメンバーからは「裏ボス」と言われているんですけど。でも、それはそれでアリです。笑。

今後、「町職員として担当が終わったら終わり」ではなくて、町職員であると同時に地域住民でもあるので、「地域住民として参加するところ」と「職員のスキルを活かしていくところ」の両方を上手に使って、地域の方と一緒にものを作り上げて行けたらいいなと思っていますし、皆さんにもそんな気持ちになっていただけたら嬉しいです。こんな高い所から私が見るのは、本当に恐縮なのですが、特に、今日は行政職の方にも多く参加して

いただいているので、そんな前向きな気持ち
持ちが湧いてきていたらありがたいです。
最後に、今後も「つむぐ」にぜひご注目
いただきたいと思いますし、よかったら
ぜひ小国町に来て、「つむぐ」の活動見て、
関わってください。心からお待ちしてい
ます。

今日は、最後まで拙い話を聞いていた
だき本当にありがとうございます。(終)